

実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER 第23号 2022年4月30日発行



2021年秋、厚木市で開催された地方大会で 座間洋らんセンターを視察しました。

目次

ごあいさつ

| | |
|--|------------------------|
| 都市近郊農業の可能性を展望した厚木大会を終えて 実践総合農学会会長 | 門間 敏幸 . . . 5 |
| 実践総合農学会設立の目的を振り返る 実践総合農学会元事務局長 | 板垣 啓四郎 . . . 6 |
| 研究フィールド「厚木」で開催された実践総合農学会地方大会 東京農業大学農学部デザイン農学科 准教授 | 御手洗 洋蔵 . . . 7 |
| 調理済食品に対する消費者意識－産地および生産者意識に着目して－ 東京農業大学 博士研究員 | 玉木 志穂 . . . 8 |
| 2021年度 実践総合農学会個別研究報告に参加して 東京農業大学国際バイオビジネス学科 | 野島 規晃 . . . 8 |
| 研究活動と個別研究報告に参加して 東京農業大学食料環境経済学科消費行動研究室 | 草野 葵実子 平 藍衣 . . . 9 |
| 2021 年度個別研究報告に参加して 県立広島大学生命環境学部生命科学科農業経営学研究室 | 宮田 愛 . . . 10 |
| 編集後記 2021 年度 実践総合農学会地方大会を終えて 実践総合農学会事務局長 | 堀田 和彦 . . . 11 |
| 新会員のご紹介 | . . . 11 |

表紙：三輪 睿太郎（実践総合農学会前会長）

2021年度 実践総合農学会第15回地方大会（厚木大会）プログラム

開会・挨拶

| | |
|--------------|-------|
| 実践総合農学会会長 | 門間 敏幸 |
| 厚木市市長 | 小林 常良 |
| 厚木市農業協同組合組合長 | 大貫 盛雄 |
| 東京農業大学学長 | 江口 文陽 |

基調講演 「地域の担い手育成について」

NPO法人農業情報総合研究所理事長 植村 春香

シンポジウム

座長解題

座長 小池 安比古

第1報告 「田んぼの学校」の取り組み

福島県矢吹町役場商工推進課地域活性係 塩田 由紀子

第2報告 JAあつぎ「夢未（ゆめみ）Kidsスクール」の取り組み

厚木市農業協同組合組織文化部生活ふれあい課 井上 美晴

第3報告 「ひまわり交流事業」の取り組み～小さな商店会の小さな友達づくり～

相武台南口商店会 戸津 信義
あすなる大学サークル「ひまわりのタネ」

基調講演者と報告者によるパネルディスカッション

司会 小川 博

座談会

| | |
|--------------------|--------|
| 有限会社座間洋らんセンター専務 | 加藤 春幸 |
| 神奈川県立相原高等学校教諭 | 小笠原 直樹 |
| 株式会社湘南きゅうり園きゅうり生産者 | 吉川 貴博 |
| 司会 | 御手洗 洋蔵 |

座長総括

閉会の挨拶

実践総合農学会副会長 佐々木 昭博

2021 年度大 1 5 回地方大会（厚木大会） 個別研究報告 プログラム

【第 1 会場】 講義棟 3 階教室（1304）

| No. | 座長 | タイトル/氏名(所属) |
|-----|--------|--|
| 1 | 山田 崇裕 | 道の駅の経営における変遷と今後の展開 ○望月 洋孝（東京農業大学国際食料情報学部）・大久保 研治（東京農業大学国際食料情報学部） |
| 2 | | 飲食店における地産地消の認証・登録制度に関するクラスター分析 －都道府県を対象として－ ○望月 洋孝（東京農業大学国際食料情報学部）・田中 裕人（東京農業大学国際食料情報学部）・上岡 美保（東京農業大学国際食料情報学部） |
| 3 | 北田 紀久雄 | 都市地域における伝統野菜の生産、販売の現状と生産拡大に向けた課題 －江戸東京野菜の練馬大根を対象として－ ○野島 規晃（東京農業大学国際食料情報学部国際バイオビジネス学科）・山田 崇裕（東京農業大学国際食料情報学部） |
| 4 | | 小説における風景と景観－安部公房の風景，志水辰夫の景観－ ○長谷部 正（株式会社啓程） |
| 5 | 大久保 研治 | 都市部での農産物移動販売に対する利用者特性 ○御手洗 洋蔵（東京農業大学農学部デザイン農学科） |
| 6 | | フェアトレード農産物に対する消費者評価とその規定因 ○岩本 博幸（帯広畜産大学農業経済学ユニット）・望月 洋孝（東京農業大学国際食料情報学部） |

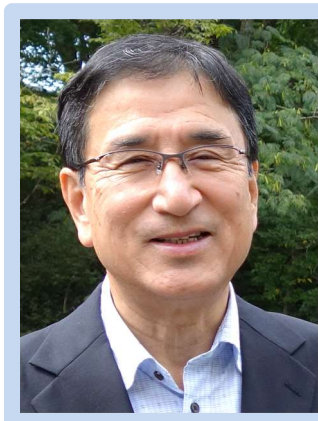
【第 2 会場】 講義棟 3 階教室（1305）

| No. | 座長 | タイトル/氏名(所属) |
|-----|-------|---|
| 1 | 菊島 良介 | 消費者の特色 JAS マークの商品に対する購入の意向と今後の課題 ○原 温久（東京農業大学国際食料情報学部）・高橋 佳永（元東京農業大学） |
| 2 | | 調理済食品に対する消費者意識－産地および生産者意識に着目して－ ○玉木 志穂（東京農業大学大学院）・高橋 克也（農林水産政策研究所） |
| 3 | | 馬肉産地における馬肉の消費実態－福島県会津坂下町を事例として－ ○早坂 理紗・石山 陸・坪井 佑美香・大久保 研治（東京農業大学国際食料情報学部） |
| 4 | 原 温久 | 喫茶店を通じた若年層の地域コミュニティ参画の可能性 －ソーシャル・キャピタルに着目して－ ○草野 葵実子・○平 藍衣・笠田 敏仁・横浦 優那・吉田 晴菜・稲野 竜聖（東京農業大学国際食料情報学部）・玉木 志穂（東京農業大学大学院）・菊島 良介・大浦 裕二・藤森 裕美（東京農業大学国際食料情報学部） |
| 5 | | 女子大学生の喫茶店選択における意思決定プロセスの解明 －複線経路・等至点モデル（TEM）からの接近－ ○渡辺 美月・上松 瑞妃・柴山 沙羅・小峰 彩奈・若林 英里・菊島 良介・藤森 裕美・大浦 裕二（東京農業大学国際食料情報学部）・玉木 志穂（東京農業大学大学院） |
| 6 | | 大学生における喫茶店での交流の現状－経堂駅周辺の喫茶店を対象として－ ○芝山 遼政・輪座 千瑞・大場 萌・山口 翔海・松本 圭太・玉木 志穂（東京農業大学大学院）・菊島 良介・藤森 裕美・大浦 裕二（東京農業大学国際食料情報学部） |

ごあいさつ

都市近郊農業の可能性を展望した厚木大会を終えて

実践総合農学会会長 門間 敏幸



新型コロナウイルスの収束が見えない中、ロシアによるウクライナ侵略が加わり、政界の政治・経済は混迷の度を増し不安が高まっています。

さて、令和3年度の実践総合農学会の地方大会は東京農業大学の厚木キャンパスで、無事対面式で開催することができました。これもひとえに東京農業大学・農学部の関係教職員の皆様のご尽力の賜物と心から感謝申し上げます。また、当日は、小林厚木市長様、大貫 JA あつぎ組合長様、江口東京農業大学学長様にも御臨席を賜り心のこもったご挨拶・激励をいただきました。心から感謝申し上げます。

さて、シンポジウムに先立つエクスカージョンでは、JA あつぎ夢未市、杜仲茶生産の碧山園、さらには座間洋ランセンターを視察させていただき、都市における農と環境の重要性、さらには都市ならではの地域の人々と一体となった多様なビジネスチャンスの可能性を知ることができました。

シンポジウムでは、中央農業高校、吉田島高校、相原高校の生徒さんによる研究成果のポスター発表が行われ、廃棄する梨の有効利用、中山間地域の振興を目的としたアグロフォレストリーによる山林と耕作放棄地におけるトチュウの栽培方法の確立、酪農教育ファーム活動など、いずれも都市近郊農業の可能性にチャレンジする素晴らしい内容でした。また、同時に 11 題の個別研究報告が行われ、実践総合農学の多様な研究成果が紹介されました。

シンポジウムでは、『未来の地域の担い手を育てる』というテーマの元、NPO 法人農業情報総合研究所理事長の植村様から、地域の担い手、新たな取り組みを紹介する基調講演が行われました。その後、福島県矢吹町における「田んぼの学校」の7年間の取り組み、JA あつぎ「夢未 Kids スクール」における通年型食農教育事業の取り組みが、また相武台南口商店街様の小学生を対象としたひまわりプロジェクトを中心とした地域で子供たちを育てる取り組みが紹介されました。また、基調講演者と事例報告者が一堂に介したパネルディスカッション、座間洋らんセンターの加藤様、相原高校の小笠原先生、湘南きゅうり園の吉川様による座談会が行なわれ、非常に有意義なシンポジウムとなりました。お忙しい中、ご報告いただきました皆様と活発な質疑に参加いただきました会員の皆様に心から御礼申し上げます。

また、今回の大会は、学会改革の実践に取り組むことでも意義のある大会となりました。その第1の取り組みとして、学会に多様な人々が参加できるように、大学などにおける研究室単位での学会加入による学部学生の研究発表機会の確保、高校では学校単位で加入し課外活動の成果などを発表できるようにしました。その結果、本大会では3つの高校の学生さんによるポスター発表が行われるとともに、11 課題の個別研究報告がありました。第2の取り組みは、学会員の研究活動の活性化を実現するため、各種表彰制度を充実しました。これまでの学術賞、奨励賞、実践賞に加えて、本学会誌『食農と環境』に掲載された優れた研究論文を表彰する研究論文賞、大会における優秀な個別研究報告を表彰する優秀研究発表賞を設け、今回の厚木大会では、優秀研究発表賞を3名の方々に授与することができました。

実践総合農学会は常にイノベーションを行い、国内外の農林水産業、地域の環境やコミュニティの活性化、消費者が求める食の持続的な供給体制の発展に関わる実践的な研究の展開とその社会実装に向けた活動を展開します。学会活動に対する会員各位の積極的な提言を期待します。

実践総合農学会設立の目的を振り返る

実践総合農学会元事務局長 板垣 啓四郎



実践総合農学会が2004年に設立されてから、すでに18年の歳月が流れました。この間に、7月の大会では、時流に合わせた日本農業が直面する様々な課題を取り上げてシンポジウムを開催し、報告と討論によって論点が深まり整理されてきました。また晩秋に開催されてきた地方大会は、北は北海道オホーツクキャンパスから南は農大亜熱帯農場が位置する沖縄県宮古島に至るまで、私が知るかぎり全国の各地で15回実施されてきました。ここでは地方のそれぞれが抱える農業・農村上の具体的な課題をテーマに取り上げてシンポジウムを開催、また農業実践者などによる体験を交えた座談会、開催地の高校生による成果発表会が実施されてきました。また大会では、院生や学部生を中心に広く個別研究報告会の場を設け、報告内容を論文にしたい会員には、学会誌に掲載できる機会を設けてきました。

投稿者は自分の研究を公表でき、おおいに励みになったことと思います。

これらの成果は学会誌『食農と環境』にまとめられ、学内外に発信して一定の評価を得てまいりました。『食農と環境』は、2022年2月の時点で28号を重ねるまでに至り、その時々タイムリーな話題も取り入れて、会員をはじめとする読者の皆様には、自分の知識を深め情報を広げることに役立つという役割を果たしてきました。またこの「実践総合農学会ニュースレター」も、会員の間をつなぐ情報交換の場としての機能を果たしてまいりました。そして何よりも、この学会を通じて、学内のキャンパスや学部・学科が実践農学を通じて相互のつながりが強化されてきた点はおおいに誇るべき点ではと考えております。不幸にもこの2年間は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、思うようにはいかない点もありましたが、昨年学会本部のご努力により従来通り対面で開催にこぎつけることができ、おおいに励まされました。

学会の運営は東京農業大学からの助成を得て、歴代の会長、学会の役員、各種委員会を構成する会員および学会事務局の方々の熱意と努力があって支えられてきていることを、あらためてこの紙面をお借りして申し添えておきます。

さて、学会は初代会長の故山極先生（追悼文は『食農と環境』28号に収録）が中心となり、農大のバックアップによって設立されたわけですが、学会の設立にあたりその目的が学会設立の趣旨として、学会のホームページに掲載されています。これを読むと、当時の並々ならぬ熱意が伝わってきます。そのポイントを抜き出してみますと、以下のように要約できます。

- 「・農学は専門深化して、多彩な農学研究者に共通するパラダイムが失われ、研究分野ごとの相互理解に立って真の学際研究を実施することが困難になってきた。
 - ・深い専門性・科学性に裏付けられた問題解決学としての農学の実践性・総合性が失われつつある。このことを踏まえたうえで、
 - ・『新たな知の創造』と『新たな知の応用』を目指す問題解決型農学の再構築が緊急の課題となっている。
 - ・高度に複合された問題の解決には、農学の各研究分野が専門深化型の学術研究の成果を、常に実社会の問題に照らし合わせて解決の道筋を検討する「新たな共通認識」を創造することが必要である。
- そのためには、
- ・基礎的な研究成果の創造と利活用、専門分野の統合による俯瞰的アプローチの推進、現場の様々なノウハウ・知恵を活用するための人的ネットワークを拡大し、社会および多くの人々に開かれた創造的な学術活動を展開して社会に貢献したい」

と記されています。

このように実践農学の重要性と必要性について警鐘を鳴らしているわけですが、設立当初と比較して今日農学の実践性や総合性が高まってきたかと問えば、逆にますます専門分化が進んできたように見受けられます。確かに科学に裏づけられた知識や情報が深まりまた広がりましたが、農業・農村が直面している現場的課題への解決に向けた研究に農学のベクトルは動いていないのではないでし

ようか。農学は現場からますます離れ、次第に生物化学、生命科学へ傾斜を強めているように感じられます。

その点でいえば、実践総合農学会は、現場の課題を絶えず直視し、農業実践者だけでなく、農産物・食品の加工・流通などに関係した企業、消費者、マスメディア、学校教育関係者に加え、政策立案者、地方行政関係者、試験場等の研究機関を巻き込み、こうした人的ネットワークを細目につなぎながら農業・農村の抱える問題や課題を多面的にとらえていくという姿勢を貫いてきました。

これからも現場から学び続ける姿勢は大切ですが、さらに一步踏み込んで、関係者と一緒になって課題を解決する方法や手段をともに考えていく協働型の実践的研究を通じて、現場に有用な成果を還元していくことが学会のもつ重要な社会的ミッションと考えられます。豊かに育まれてきた人的ネットワークを通じて、それぞれがアイデアや知恵、知識などを発信し、また成功と失敗の事例を含めた経験知を共有していくことが、今後ますます実践総合農学会には期待されるのではないかと考えています。

研究フィールド「厚木」で開催された実践総合農学会地方大会

東京農業大学農学部デザイン農学科 准教授 御手洗 洋蔵



2021年度の実践総合農学会地方大会が東京農業大学厚木キャンパスで開催されることとなり、筆者自身、普段厚木市を中心に研究活動を行っていることから本大会に参加することとした。新型コロナウイルス感染症の蔓延とともに、毎年のように対面で開催されていた各学会の全国大会が軒並み紙面開催やオンライン開催される中で、久々の対面式での実施となった。あらためて対面式の大会に参加して感じたことは、紙面やオンライン開催とは異なって臨場感があり、心地よい緊張を感じられたことだ。さて本大会において私自身は、午前に行われた個別研究報告会の発表者として、また午後に行われた座談会の司会者として登壇することとなった。

【個別研究報告会】

報告会では、普段厚木市を拠点として研究調査しているため、その内容について報告することとした。中でも近年ニュースなどでも取り上げられている「移動販売車」の内容について報告した。移動販売車というと、地方の中山間地域で買い物に不便を感じている人々、いわゆる買い物弱者の救済策の一つとして注目されることが多いが、実は厚木市などの地方都市でもその必要性に迫られている。全国の地方都市に目を向けると、主要駅や行政機能の集中する中心市街地では多くの人口がみられるが、郊外では高齢化や人口減少が進行するに従いスーパー等の食料品店の撤退がみられるようになった結果、中山間地域同様に買い物弱者が発生している。東京農業大学農学部と包括連携協定を結んでいるJA あつぎでは、運営する農畜産物直売所「夢未市」に付随するかたちで、厚木市内の高齢者世帯の買い物支援を目的に移動販売車「ゆめみちゃん号」を運行している。今回の個別報告会では、このような移動販売車の運行が買い物弱者救済の一助になるだけでなく、地域コミュニティ形成の一翼を担っていることを訴求できたのではと感じている。

【座談会】

座談会は「地域の担い手について考える」というテーマで行われることとなった。そこで、東京農業大学農学部農学科の卒業生である3名（若手生産者2名、農業高校教諭1名）をパネラーに招き、パネルディスカッション形式で行われた。座談会を通じて思ったことは、パネラー3名全員が非常に高いモチベーションのもと、地元の活性化も視野にそれぞれの仕事に取り組んでいるということだ。あらためて現在の東京農業大学において、学外者から高い評価を得られている要因は、このような卒業生の活躍があるからこそだと実感した。私自身も、大学教員という立場から、今回のパネラー3名のように、卒業後に活躍できる人材の育成に貢献したいと思った。

以上、2021年度の実践総合農学会地方大会への参加は、当初考えていた以上に満足感の高いものとなった。今後も継続して参加を重ねられたらと思う。

調理済食品に対する消費者意識

—産地および生産者意識に着目して—

東京農業大学 博士研究員 玉木 志穂



このたびは第一回優秀研究発表賞—若手研究者部門にご選出いただきありがとうございます。ご指導いただいた共著者の方や、選考に携わった全ての方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

本研究は、日本において食の簡便化が進行していること、並びに農林水産省が「第4次食育推進基本計画」のなかで「産地や生産者を意識して食品を選ぶ国民を増やす」といった目標を掲げていることの2点を問題意識として、調理済食品に対する利用者意識および意識別にみた消費者像を示し、調理済食品に対して産地や生産者を考慮する消費者の特徴を明らかにすることを目的としております。

2021年6月下旬（3回目の緊急事態宣言と4回目の緊急事態宣言の間）に実施したWebアンケート調査で取得したデータを分析し、以下、3点の知見を示しました。

第一に、COVID-19流行下における簡便化食品のなかでの調理済食品の位置付けを明らかにしました。簡便化食品のなかでも調理済食品が最も利用されており、COVID-19流行下においても簡便化志向が継続している可能性を示しました。このことは、調理済食品が日本の食生活を形成する重要な手段となっていることを示した成果といえると考えております。第二に、調理済食品が普及した現時点での調理済食品に対する消費者意識を明らかにしました。調理済食品に対して品質への不安や手抜き感を抱くといった負のイメージを抱いていることを示した一方で、生産過程を考慮する気持ちといった正のイメージも有していることを定量的に示しました。第三に、調理済食品の購買における産地・生産者意識についての課題を提示しました。生産過程を考慮する意識は確認されたものの、調理済食品のメインユーザーである単身世帯や男性は生産者を考慮する意識は抱いているとは言い難く、この点を踏まえると、「産地や生産者を意識して食品を選択する」といった目標の達成は容易ではないと結論付けられます。ただし、本研究ではどのような情報提供が産地や生産者を意識した食品の購買に結びつくかには踏み込んでおらず、今後の課題として残されています。

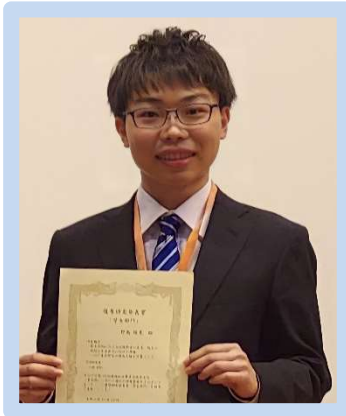
最後に個人的な目標になりますが、今後は「産地や生産者を意識して食品を選択する」といった目標を達成するために消費者のより具体的な食料品の購買行動や意識を把握する必要があると考えています。その際、アンケート調査で得られる意識データだけでなく、視線軌跡データなどの生体情報による無意識下のデータを組み合わせつつ、課題解決に取り組んでいく所存です。本受賞を励みに、今後もより一層精進して参ります。この度は誠にありがとうございました。

2021年度 実践総合農学会個別研究報告に参加して

東京農業大学国際バイオビジネス学科 野島 規晃

この度、2021年実践総合農学会厚木大会に参加させていただきました、東京農業大学国際バイオビジネス学科4年の野島規晃と申します。今回私は本学会の個別研究報告会にて報告をする機会をいただき、卒業論文のテーマでもある「江戸東京野菜」について報告させていただきました。また、学会事務局の皆様より今回の学会ニュースレター執筆のお話をいただき、拙い文章ではありますが、私の研究内容や実際に報告を行った時に感じたことなどを書かせていただきます。

私は4年間の学生生活を送る中で初めて「学会」に参加しました。大学の講義やゼミ活動の一環で報告会を行った経験はあるものの、全て学生同士での報告であり、先生方の前で報告を行うことは初



めてだったため、参加を決めたときから学会当日まで不安が続きっぱなしでした。私は報告順が3番目でしたが、その前の先生方の報告を拝聴した際の緊張感は鮮明に覚えています。

今回私は「都市地域における伝統野菜の生産、販売の現状と生産拡大に向けた課題ー江戸東京野菜の練馬大根を対象としてー」をテーマに報告を行いました。江戸東京野菜は、東京都発祥の伝統野菜です。現在、JA 東京中央会を中心に江戸東京野菜の知名度向上や流通拡大を目的とした「江戸東京野菜普及推進事業」が展開されています。本研究では、練馬大根を事例に伝統野菜経営の実態や固定種の種子の確保の方法を解明し、生産拡大に向けた課題を考察することを目的とし、練馬区役所と練馬大根生産者に対するヒアリング調査を行いました。調査結果から、練馬大根は話題性があることによる波及効果があること、収益は経費が少額であることから高い収益性があること、販路としては練馬区による買取などの主に3方式で確立していることが明らかになりました。また、江戸東京野菜の生産拡大に向けた課題として①生産者の労働負担の軽減と②江戸東京野菜全体における流通システムの確立が必要であると考えました。

質疑応答の時間では、学会長である門間敏幸先生より調査結果のグラフに関する貴重なご意見をいただき、大変参考になりました。また、他にも報告を行った先生方の研究テーマの決め方や分析方法、PowerPoint の活用方法及び報告時の所作は大変勉強になり、今後社会人としてプレゼンテーションなどを行う際に参考にさせていただきたいと感じました。

最後になりますが、新型コロナウイルスが未だ猛威を振るい続けている状況下で、学会の準備、運営を行ってくださった学会事務局、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。また研究を進めるに当たり、ご指導頂きました山田先生、報告準備に協力してくれたゼミのメンバーにも心より御礼申し上げます。今回、優秀研究発表賞「学生部門」という素晴らしい賞に選んでいただき光栄です。この経験を糧にし、今後の自分のさらなる成長へとつなげてまいります。

研究活動と個別研究報告に参加して

東京農業大学食料環境経済学科消費行動研究室 草野 葵実子・平 藍衣



この度、令和3年11月13日に開催された実践総合農学会に参加させていただきました東京農業大学食料環境経済学科3年の草野葵実子と平藍衣です。本学会にて個別研究報告をする機会を頂き、私どもの所属する消費行動研究室で行った研究について発表いたしました。昨年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴いオンライン上での開催でしたが、今年度は対面にて大会の開催と研究成果発表の場を設けていただきましたこと誠にありがとうございます。私たちにとって、今回が初めての学会ということもあり緊張しましたが、1年間の研究成果を学会という場で発表できてうれしかったです。また、質疑応答で研究をより良くするためのアドバイスをいただくことや、他の学生や先生方の発表も聞くことができ、貴重な経験をさせていただきました。

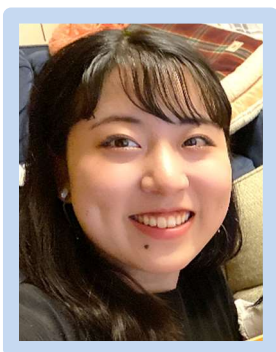
2021年度の消費行動研究室では、若年層と地域社会の関係が希薄化しているという背景のもと、古くから交流の場とされてきた喫茶店が若者と地域社会を結ぶ役割を有するのではないかと考え3つの研究を行いました。私たちは、そのうちの1つである「喫茶店を通じた若年層の地域コミュニティ参画の可能性ーソーシャル・キャピタルに着目してー」というテーマで研究を行いました。私たちが研究を行うのは初めてで、研究計画の立案や内容の決定、分析方法など1から学びました。そんな中、みんなの予定や意見が合わないこと、個人で忙しくみんなが集まって研究の話をする時間がないなど、スムーズに進まないことも多々ありましたが、衝突はしながらも、みんなが忙しいことを理解して自分ができることをみんなが少しずつ行えたからこそ研究が最後までできたと思います。研究室全体の頑張りがあったからこそ、本学会において学生部門の優秀研究発表賞

という素晴らしい賞を受賞できたと思います。このような賞をいただき、努力の成果が形となったことを非常にうれしく思います。

最後になりますが、今年度1年間の研究室活動は、自分にとって本当に良い経験になりました。研究のやり方はもちろんのこと、毎回の勉強会の資料作成や勉強会の内容の決定、みんなと団結して研究室をまとめあげることの難しさ、どうしたらみんなにわかりやすく説明できるかなど、団体や人として大切なことも学びました。この1年を通し、研究室活動で悩んでいる際にアドバイスをしてくださり研究室を支えてくださった先生方・大学院生、至らない室長ではありましたが、最後まで一緒に研究をしてきた役員や室員にもこの場を借りて感謝申し上げます。

2021年度個別研究報告に参加して

県立広島大学生命環境学部生命科学科農業経営学研究室 宮田 愛



令和3年度、実践総合農学会個別研究報告に参加させていただきました、県立広島大学4年の宮田愛と申します。私は、本学会での報告が初めての研究報告であったため、不慣れな部分もあり、緊張気味での参加となりました。また、コロナ禍のためオンラインでの発表となったという点も、例年の研究報告の雰囲気味わうことができなかつたため残念ではありましたが、その分落ち着いて発表したり聞いたりする事が出来たのかなと感じています。短い時間ではありましたが、発表や質疑応答を通して、同じ農業や食に関する研究を行っている人によって様々な視点があり、新鮮な意見も聞けたため、自身の研究内容をより深める良い機会になったと感じています。

私が研究してきたテーマは、「カロリーベース食料自給率が与える危機感の真意」についてでした。この研究に着手しようと考えたきっかけとして、新型コロナウイルスの感染拡大が影響しています。2020年に入り、新型コロナウイルスの大流行によって移動制限や国際物流の停滞等が起こっていた一方、カロリーベース食料自給率が低い日本で、食料が不足し生命や健康が損なわれる事態には陥っていませんでした。そこで、カロリーベース食料自給率の低さから、計算上約6割の食料が海外から輸入されており、有事に日本への安定的な供給に影響が生じるのではないかと危惧されている中で、実際にカロリーベース食料自給率が与える危機感とはどのようなものなのか、その真意について研究しようと考えました。

この研究テーマが定まるまで、何となく興味のある分野はあったものの、明確にテーマを決める事が出来ず、どのようなテーマに決め研究を進めていくか悩むこともありましたが、一人では行き詰ってしまう事もありましたが、研究室のメンバーや先生のアドバイスは心強い手助けとなっていたと感じています。そして、始めはスムーズに進まず上手く行かないと思っていた研究も、段々と道筋が見えて行くにつれ、楽しいと思えるようになりました。研究室でのミーティングはオンラインで行う事も多かったですが、そんな中でも、新たな意見を交換し、お互いの研究内容をより深める事が出来たため、非常に充実した環境であったし、そのおかげで堂々と学会での報告が出来たのだと思います。今回の個別研究報告は私自身にとって本当に良い経験となったし、学ぶことが多かったと感じています。答えがないからこそ、様々な視点からの意見に触れる事ができ、自分の思うように研究を進めて行く事ができる楽しさを感じる事ができたと思っています。本学会報告後、特に門間先生の的確なコメントに基づき、分析と考察を深めることで、オープンアクセスであり発行の早いことを理由に在籍大学の紀要に投稿、掲載まで至ることができました（生物資源学術誌、No. 14、pp. 1-13、2022. 3. 31印刷）。

私の研究についてアドバイスをくださった先生、研究室のメンバー、そして、このような発表の機会を設けてくださった方々にこの場を借りて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

実践総合農学会「ニュースレター第23号」

発行日：令和4年4月30日

編集責任者：実践総合農学会事務局長 堀田 和彦

学会問合先：実践総合農学会事務局

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1 東京農業大学総合研究所内

TEL：03-5477-2532 FAX：03-5477-2634 E-mail：spia@nodai-rs.net URL：http://spia.jp/
